

曲 目 解 説

『エグモント序曲、作品84』はベートーヴェン（1770—1827）が、1810年夏に書き上げた戯曲のための序曲である。この戯曲『エグモント』は、オペラ等ではなくゲーテ（1749—1832）の史劇で、先達シェークスピアに依存した作品である。高次の道徳的品格、豊かな魂的感応、洗煉彫琢された言語の観点から古典主義の代表的作品とされている。エグモント伯爵は、歴史上実在しており、16世紀の後半にスペインからオランダが独立する際に初期独立運動を指導した人物である。彼は独立前にスペイン王フェリペ2世の代理人オランダ総督アルパ公に逮捕され処刑されている。エグモントのような悲劇の英雄・建国の礎に魅せられたベートーヴェンが、本戯曲のヴィーンでの再演を前にゲーテから委嘱されてこの序曲を書き上げたのである。ベートーヴェンはゲーテへの手紙の中で次のように書き残している。「この戯曲を読んで、私はそのテーマに心酔しました。私は貴方を通じてエグモントを語り、彼に憧れました。そして音楽を書きました。」と。

『ピアノ協奏曲、イ短調、作品16』は、グリーク（1843—1907）が1868年に作曲したのもで、『ペール・ギュント』と並ぶ彼の代表作である。2年前にグリークは、クリスチャニア・フィルハーモニー協会の指揮者となり、前年には従妹のニーナと結婚し、この年には長女を得て夏になるとデンマークのソレレードに滞在しながら、この協奏曲を完成した。グリークが最も幸福で、理想に燃えていた頃の作品である。当時まだグリークは、「デンマークのメンデルスゾーン」「北欧のショパン」と呼ばれて、賛辞ではあるけれども亜流として認識されていたのである。理想としているノルウェー国民音楽は、ライブツィヒ音楽院時代には未だ確立されておらず、1864年の秋頃からグリークは、ノルウェー国内を旅してノルウェーの民謡を聞き、国民音楽へ傾倒していった。彼の生地ベルゲンは、フィヨルドに刻まれた深い港湾にあり現在でも厳しくなほ豊かな自然に恵まれている。生地で育まれたノルウェーの民族精神が、この協奏曲には聞き取れる。冒頭の独奏ピアノの強奏はグリークの響きであるとともにノルウェーの響きでもある。

『交響曲第9番、ホ短調、作品95、新世界から』は、ドヴォルザーク（1841—1904）がニューヨーク滞在中の1893年に作曲した彼の最後の交響曲である。彼は音楽とは無縁の家庭に育ち、親の反対を押し切って音楽に志し、苦学の末やっとならヴィオラ奏者として身を立てる。その後スメタナをはじめ当時の著名な音楽家、リスト、ブラームス、ビューロー等の知遇を得て、祖国チェコだけでなくヨーロッパ中で、作曲家として名声を魅せることになる。1892年ジャネット・サーバー女史の招聘で、新設のナショナル音楽院院長となってニューヨークに渡る。そこで彼自身のチェコ人の血が、ニグロやインディアンといった異文化に触れて、楽創を得たのがこの交響曲である。

全体を通じての特徴は、ソロ楽器、フルート、オーボエ、ホルン等が単独で用いられて、レトロで民衆的な響きを醸し出していることである。特に、第2楽章の冒頭に、かの有名なイングリッシュホルンによるテーマがある。このテーマは黄昏をイメージしやすいのだろうか。小学生の時、下校時間のBGMで耳慣れているあの『遠き山に日は落ちて』である。このメロディーに欠かせないのはソロ楽器、イングリッシュホルンである。その音色は、音響学的に言うならば倍音が少ないという特徴を持っていて、オーケストラの他の楽器が奏されている時でも、際立って聞こえてくる。アメリカの原野で、黄昏時にどこからか聞こえてくる草笛にも似て、イングリッシュホルンの音色の際立ち、澄み渡った大気を想起させ、地平線に沈む太陽を想像させてくれる。

（藤井部 勉）